水明インターネット句会（選句・選評）　令和四年五月

1	いつまでも慣れぬ正座や更衣	檜鼻ことは	
2	噴水の輪に入る鳥や五月晴	秋谷風舎	
3	先取りの夏が微笑むウインドー 先取りの夏が良い、おしゃれな句。輝かしい夏を迎える、意気軒高な作者が、うかがえる。爽やかな句である。	古賀由美子	静香 風舎
4	青と黄の旗よ永久なれ麦の秋 暑さが兆す中　冷たい薬液が体に沁み込む感じをうまく表現している情景が浮かぶ、「ひんやり」の措辞がいい。経験あり。点滴の感触がよみがえる	木村隆夫	
5	ひんやりと点滴の入る浅き夏 お父さんに肩車して貰い、御神輿の掛声に合わせて上下に揺すってもらって喜んでいる幼い子の表情がよく見えている。	ほのる	俊晴 寒立馬 きいち いちい
6	肩車上下に揺るる祭りの子	村杉清吉	正信
7	蜘蛛の囲や雨に重たき銀細工 「重たき」で蜘糸の垂れ下がった様が目に浮かぶ。銀細工の表現が素晴らしい。雨上がりの蜘蛛の囲を銀細工と捉えた詩的感覚。季語の持つ「鬱陶しさ」の感覚と、中七下五の「軽い気だるさ」の取合わせが秀逸と思う。下5と季語の取り合わせが見事である。雨雫のついた蜘蛛の巣を銀細工と表現して見事です。見立て句ですが、「銀細工」が良いです。細かな描写が凄いです。下五の銀細工が秀逸です。蜘蛛の巣は雨に濡れてはじめて気づくことも多い。その美しさを「重たき銀細工」が美しい。えたところが良い。「銀細工」美しい表現です。「銀細工」と捉水滴のついた蜘蛛の巣の繊細な美しさを銀細工にたとえたのがよい。	新暦文	隆夫　月を　いちい るみ子　鶴城 一葉　のぞみ 正信　マスミ 清吉　芳春 稀香　京子
8	二人居て独りを思ふ明易し 同室で独りを願う心情表現。	荒一葉	隆夫
9	這松に夏布団干す山の小屋 山開きを控えて、準備に忙しい一方、爽やかな、山の空気が感じられる。見たことある景色です。	木村るみ子	風舎 きいち
10	虹色に映ゆる城跡しやぼん玉 季語の色彩と儚さが歴史の栄枯盛衰と重なる。	保坂翔太	春香
11	咲き満ちて卯の花こぼす涙かな 満開の卯の花、忘れられない悲しい想いが蘇ったのでしょうか。	本橋稀香	道を
12	結び葉の光陰かすむ二の鳥居 景が清らかで良い。	森美枝子	静香
13	青葉騒ピュリツァー賞の狼たち 胸に刺さります。	網野月を	静香
14	夏立つ花器に涼めく緑の葉	荒川久実	
15	産声の懐かしき朝柿青し	池田珪子	

水明インターネット句会（選句・選評）　令和四年五月

16	るみ子	陽を含む葉の重なりて夏きざす	参道の夏の情景のよう。	後記朝香
17	美枝子 清吉 喜夫	農鳥（のうとり）の目覚めし富嶽夏来たる	雄大な景色が浮かびます。雄大な風景が見事に表現されている。残雪の鳥の表現が素晴らしい。	丸山マスミ
18	マスミ	ダービーや券握り締むゴール前	後数秒で勝敗が決まるゴール前。自分の馬券は当たりか外れか。	かげろう
19	風舎	沙羅の花雨降る朝は俯いて	季語の「沙羅の花」と、中七「雨降る」、下五「俯いて」の斡旋が秀逸	井口俊晴
20		浮島に黒き川鵜の凛と立ち		太田友代
21		杜若花落ちて尚葉の先や		泓実
22	ことは 正信 六弦 鶴城	牛蛙プライドだけで生きている	ユーモラスな一句、そう思える牛蛙の風貌です。牛蛙は作者か。開き直った人生に賛同します。季語の選択が巧みで、言い切りが潔いです。開き直りが良い。	望月のぞみ
23		母を焼く青嵐去りし空の下		霜里
24		五月晴濡れ下駄の列縁先に		寒立馬
25	美枝子	目の前で脚組む女梅雨晴間	目の前で美しい脚を組まれたらドキッとしますね。	染谷正信
26	喜夫 寒立馬	カフェで聴く「茶色の小瓶」麦の秋	琥珀色のウイスキーを舐めながらジャズを聴く。曲名を含め全体にノスタルジーを感じた。	野田静香
27		紅薔薇ときめく心また恋か		奥山粉雪
28		尼寺の穢れ知らざる白牡丹		俳爺
29	ことは　朝香 隆夫　鶴城 由美子 一葉　かげろう 清吉 のぞみ	風が風追ひ抜いてゆく青田道	青田の道に吹く風、まさにこのような風です。風の吹く様を上五中七で巧みに表現。風が風を追い抜くという新鮮な表現。鮮やかな青田道が見える。「風が風追い抜いて」の措辞に同感。リズムが良く爽やかな気分にさせてくれる。句全体が清々しい季節感を表現している。上五、中七が青田風を気持ちよくしています。田園に吹く心地よい風を感じる。	後藤允孝
30	暦文	この道に別の人生青蛙	別の人生はもしかして、、、。	青木鶴城

水明インターネット句会（選句・選評）　令和四年五月

31	俊晴	煙突に飛び込む勇気四十雀 元気な小鳥の姿が可愛い。	渋谷きいち
32		風薫る句碑をさがしに調神社	石関六弦
33		ほのかなる薔薇の香りや朝の道	宮崎チアキ
34		泣きまねの空よ鳥らは囀るを	山中いちい
35	かげろう	傘二本老いたる犬と夏季休暇 想像させる幅が広く好感。	持永敏夫
36	るみ子	豆御飯揃いの茶碗の新しき 二人で食べる豆ご飯良いですね。	石田春香
37	由美子 のぞみ	南風シーツ膨らみ一回転 風の突風がシーツを一瞬で翻す爽快な風景。風の音が聞こえる。	小林京子
38	珪子　いちい 月を 粉雪 允孝 寒立馬 きいち	夏の月更地となりし父の庭 大切にしておられたお父様のお庭が更地になった淋しさが伝わります。時の流れへの挑戦でしょうか。眼差しの優しさを感じる。お父さんが亡くなられたのでしょうか。思い出深い庭だったのですね。「更地」にこめた思いに深く共感。寂しさがつたわります。薄明るい月の光にもの悲しさが引き立てられている。	岡田芳春
39	俳爺 京子	庭からの風もご馳走夏料理 夏料理に吹いてきた風までがご馳走という詠みぶりに好感が持てました。風もご馳走とした発想が良い。	日髙道を
40		万緑や命のつぼみ弾けだす	古賀由美子
41	月を	桜蕊降りふと我に立ち返る 我のみでなく世間が時の移り変わりを実感します。	木村隆夫
42	俊晴	子どもの日驢馬にまたがる得意顔 ロバに跨る男の子の姿が目に浮かぶ。	秋谷風舎
43		早起きが楽しき日課夏の露	檜鼻ことは
44	由美子 六弦 稀香 翔太	窓の開く旅の列車や青田波 窓を開けられる列車がいいですね。さわやかな夏の風を感じました。「あ行」が多く、明るい旅が見えました。窓の開く列車からの青田波の景が爽やか。窓が開かない新幹線より、窓が開く列車の方が旅を満喫できます。	ほのる
45	珪子 道を	箱根号二番ホームの夏帽子 これからの旅の楽しさがシンプルにまとめられています。さあこれから出発する箱根旅行、夏帽子の季語が効いています。	新暦文

水明インターネット句会（選句・選評）　令和四年五月

46　允孝
本堂の天蓋揺るる若葉風
五月の風に揺れている天蓋の様子が爽やかに詠まれているようです。
村杉清吉

47
街角でUVマスク薄暑かな
木村るみ子

48　朝香　允孝　マスミ　芳春
鯉のぼり村に今年は一基増え
過疎化と少子化の村に嬉しい春となった様子が詠まれている。少子化の時代に鯉のぼりが増えたことは喜ぶべきでしょう。過疎化が進む中で、村に子が誕生。村中の喜びが伝わってくる。「今年は」に何年かぶりの新生児に喜ぶ村を感じます。
荒一葉

49
爪革の外すに易き青時雨
森美枝子

50
風の意のままに藤浪右左
本橋稀香

51　稀香
曲がりたる間欠泉や春一番
春一番の風の強さを間欠泉が曲がると表現して臨場感があります。
保坂翔太

52
海黙す神に預けし沙羅の花
池田珪子

53
そよそよとうつわに盛りし葛餅や
荒川久実

54
夏浅し星の王子の犬となる
網野月を

55　一葉　俳爺
堰を越す水音眩し夏始
流れが堰を越す音を「眩し」と捉えた手柄に季語「夏始」が的確。堰を越す水に聴覚と視覚がコラボして夏を迎える佳句になりました。
丸山マスミ

56　かげろう
渚への緑の路や夏立ちぬ
海の近い場所の立夏の鮮やかさが見えるよう。
後記朝香

57
落羽松緑逆立て整列し
太田友代

58
鯉幟泳ぐ隣家は胸を張る
井口俊晴

59　文　六弦　暦　喜夫
辞書を閉ぢパソコンを閉ぢ新茶汲む
お疲れ様、虎やの羊羹でも。リズムが良く、新茶への敬意を感じます。無の境地に誘うルーティン。
かげろう

60　ことは
ぷよぷよの母の耳たぶ柏餅
ほのぼのとした一句、絶妙の取り合わせに感服いたしました。
望月のぞみ

水明インターネット句会（選句・選評）　令和四年五月

61		家の路地凛と咲く薔薇紅花托	泓実
62	美枝子 ほのる	水虫に三行半を渡したし 中七の三行半が的をついている。三行半が愉快。	染谷正信
63	俳爺	めざし焼く音と煙とはねる炭 音と煙と炭を並列して焼くシーンがいっそうつまびらかになりました。	寒立馬
64	翔太	雨上がる墓石の裏の青とかげ 墓石の裏から青とかげが出てきて、びっくりする様子が分ります。	霜里
65		峡をゆくトロッコ列車新樹光	俳爺
66		新樹雨水琴窟の音のする	奥山粉雪
67		暮れ泥む街の喧騒夏きざす	野田静香
68	暦文 粉雪 道を 芳春	褒めらるることのなき日々半夏生 何歳になっても褒められたいですよね。佳句です。それでも暮らしている、半夏生が効いている。加齢とともに思うように体も心も動かなくなります。物憂げな気分と「半夏生」の取合わせが素敵です。	青木鶴城
69		誰よりも大粒ねらひ苺摘	石関六弦
70	ほのる 京子 春香	ああ言えばこう言う子にも夏は来ぬ 子の未来を見守る気持ちが季語に表れている。歌「夏は来ぬ」の美しい歌詞に上五・中七の取り合わせの可笑しみ。慣用的な言い回しのリズムとユーモアが季語の情緒と結びついていて秀逸。	後藤允孝
71	珪子	豆蒔くや何れ女房の塩かげん 家庭円満の極致。	渋谷きいち
72	朝香 翔太 春香	無職なり手持ちぶさたにところてん 職を辞し暇になった無聊を慰めるところてんの措辞が良い。心太の作り方を、レシピを見て自分で作っている姿を想像します。前半の重みを季語の響きと透明感が軽くして不思議な明るさを感じる。	持永喜夫
73	ほのる	武蔵野の田に水光り夏に入る 田の水に夏が広がり始まる匂いがする。	宮崎チアキ
74		ひたと視る鹿嶋の杜の鹿の子かな	山中いちい
75		フルートの音階練習薄暑かな	小林京子

水明インターネット句会（選句・選評）　令和四年五月

76　粉雪

こどもの日武者は父にぞなりにける

武者飾りをしてあげていた子供が父になった！感慨深い。

石田春香

77

父呉れし魔除けの獅子や沖縄忌

日髙道を

78

幸せは薔薇のテラスのティータイム

岡田芳春